

野菜茶業研究所ニュース

No.7 2003. 6

CONTENTS

表紙	●茶園の殺虫剤使用量削減を目指して	1
視点	●お茶の安全性・安心感の確保に向けて ー茶の品質保証のための技術開発ー	2
研究情報	●①コンパクトイオンメーターを用いた添加茶の一次スクリーニング	3
	②DNAマーカーによる市販緑茶の品種識別	4
	③茶の送風式捕虫方法および乗用型送風式捕虫機	5
	④野菜・茶およびウメの原産地表示判別技術の開発	6
お知らせ	●平成15年度野菜茶業課題別研究会の開催計画	7
所の動き	●①平成14年度各推進会議及び評価委員会報告	7
	②企画調整部が再編強化されました	9
	③平成14年度農業技術研修生修了式及び平成15年度入所式	9
	④つくば農林研究団地一般公開	10
	⑤特許・実用新案・著作権、新品種・中間母本	10
	⑥人の動き	12



『茶園の殺虫剤使用量削減を目指して』

茶業研究部では、民間企業との共同研究を通して少量の水を含んだ強制風で害虫を捕獲あるいは圧死させる乗用型送風式捕虫機を開発しました。

(5 ページに関連記事)

視点

お茶の安全性・ 安心感の確保に向けて — 茶の品質保証のための技術開発 —

茶業研究官 袴田 勝弘

はじめに

近年、BSE、残留農薬、製品の偽装表示等食品の安全・安心を脅かす事件が相次ぎ、消費者の食品の安全性に対する不信感が増大している最中、茶でも添加茶の非表示や茶生産地の偽装表示が発覚するなど、安全性・安心感を求めるその矛先は生鮮食料品のみならず、加工食品である茶にも及ぶようになった。このため、消費者の茶に対する安全性・安心感の確保のための技術開発が、茶の生産・流通段階を通じての重要課題となっている。このような情勢を受け、昨年度の野菜茶業試験研究推進会議では、重要問題として「野菜・茶の生産・流通における安全・安心確保に関する技術開発」について、現状把握を行うとともに研究の重点化方向について検討した。

安全性確保のための技術開発

茶の安全性確保に関わる事項としては、化学合成農薬の使用・残留問題がある。化学合成農薬に関しては、使用基準を守っていれば安全性は確保されているが、農薬の使用を極力抑えるに越したことはない。そのため、当研究所では、病虫害の総合的管理技術の観点から病虫害抵抗性品種の育成など息の長い研究に加え、病害被害許容水準の設定や害虫の高精度発生予察技術の開発、天敵・フェロモン等の利用等による生物的・物理的・耕種的防除など、産との連携を深めながら研究を進めており、電撃型自動計数

フェロモントラップや送風式捕虫機の開発、チャの難防除害虫であるクワシロカイガラムシの適期防除法などの減農薬のための生産現場において実用的に利用されうる技術を開発している。また、今後の課題としては、農薬、微生物等の簡易で迅速な検出法の確立や製茶時のアクリルアミド生成防止技術の開発などがあり、他法人や産学との連携が肝要である。

茶の安心感確保に向けての取り組み

健康飲料である茶の消費拡大を目指す上で、消費者の安心感確保は、重要な課題である。そのためには、適正な品質表示は不可欠であり、また、その表示の正しさを科学的に検証可能なシステムの開発が求められている。これまでに、平成6年度に開発した添加茶の判別法を、現場で利用しやすいコンパクトイオンメーターを利用した簡易迅速な判別手法に仕上げるとともに、チャ生葉のDNA品種識別を市販緑茶の品種識別技術に発展させるなど、偽装表示の抑止力となる成果を挙げている。さらに、平成14年度からは、原産地表示判別、品種識別、履歴管理・情報システムを3本柱とする原産地表示判別技術の開発へ着手したところである。茶の安心感確保は、終わりのない技術開発であり、産学官の連携の下、互いに補完し合う形で技術開発を進める必要がある。

コンパクトイオンメーターを用いた 添加茶の一次スクリーニング

研究のねらい

グルタミン酸ナトリウム等調味料を添加して味付けした茶（添加茶）が、通常の茶（無添加茶）に混じって流通する場合があります、健全な流通の障害となっている。そこで、流通の現場でも利用できる、安価で簡便な添加茶判別手法を開発する。

研究の成果

- ①茶葉抽出液中のナトリウムイオン濃度は、定価数万円程度の簡易なコンパクトイオンメーターで測定できる（写真1）。抽出液の調製や測定はきわめて簡単であり、特殊な機器や試薬は必要としない（図1）。
- ②本イオンメーターで測定した茶抽出液中のナトリウムイオン濃度の測定値は、高精度分析機器であるイオンクロマトグラフィーにより分析した値と高い相関を示す。また、添加茶では無添加茶に比べ高い値を示した（図2）。
- ③無添加茶の場合にはナトリウムイオン濃度は一定の範囲に収まる（図3）ため、本法での測定値がより高い値を示した茶は添加茶であることが疑われる。



写真1 コンパクトイオンメーターを用いたナトリウムイオン濃度測定

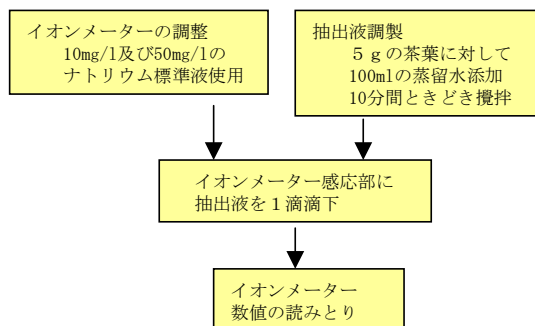


図1 コンパクトイオンメーターを用いたナトリウムイオン濃度の測定手順

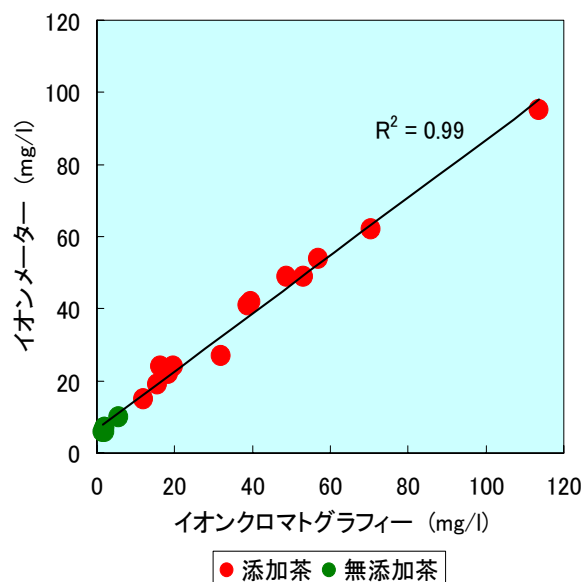


図2 2種類の方法で測定したナトリウムイオン濃度の比較

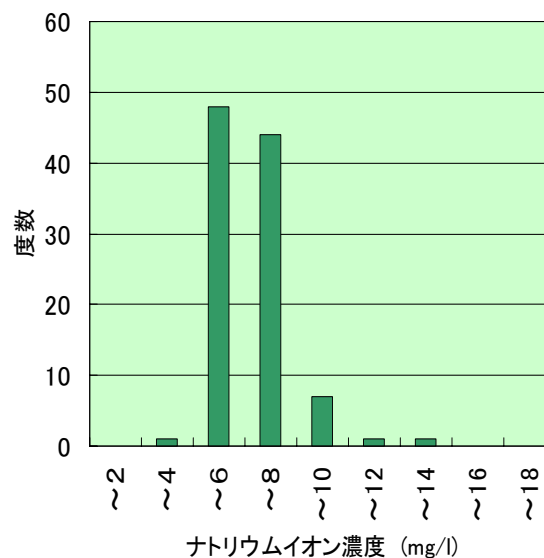


図3 無添加茶抽出液中のナトリウムイオン濃度の頻度分布 *イオンメーターで測定した。

成果活用面の留意点

無添加茶であっても、潮風等の影響により図に示した値よりも高いナトリウムイオン濃度を示すこともあり得る。より厳密な判別には、アミノ酸や核酸類の分析が有効である。

（機能解析部・堀江秀樹）

DNAマーカーによる 市販緑茶の品種識別

研究のねらい

緑茶には、品種名の偽装、原産国不表示といったJAS法違反の疑念がもたれている。しかし、外観からの品種・原産国識別は不可能である。そこで、市販緑茶の表示の適正化を促すため、DNA品種識別および間接的原産国判別法を開発する。

研究の成果

- ①市販の緑茶葉1断片から簡易にDNAを抽出する手法を改良した（図1）。
- ②チャ新鮮葉で確立されたDNAマーカーのうち7つを用い、茶葉1断片の品種識別が可能であった（図2）。
- ③1試料から20～30ヶ程度の茶葉断片をサンプリングし、1断片ごとに品種識別することで市販茶にブレンドされた品種名の同定とその混合割合の推定ができる（表1）。

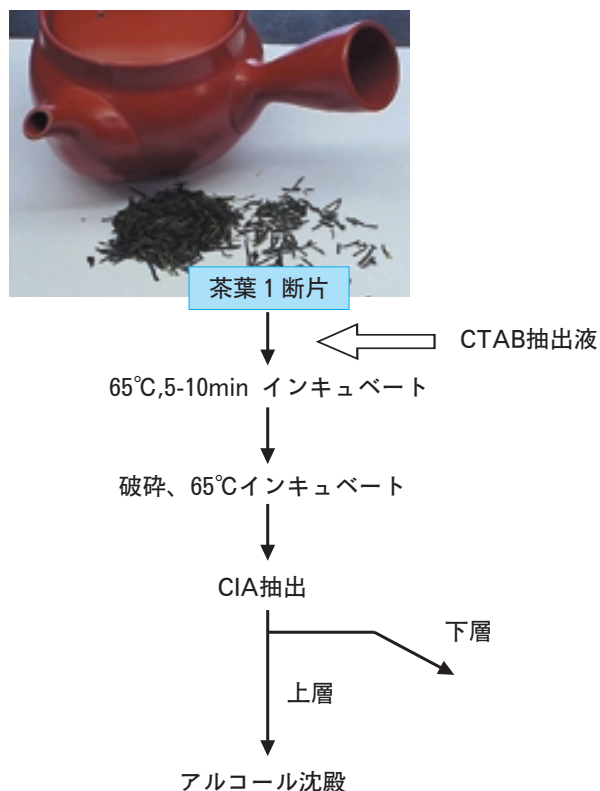


図1 茶葉からのDNA抽出法

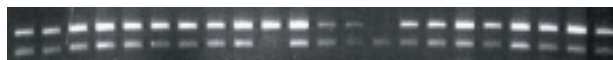


図2 茶葉の1断片より抽出したDNAからの品種識別
茶葉1断片ごとにDNAを抽出し、マーカーCHSexon2/Bsp HIでの多型パターンを見た。各レーンが茶葉1ヶに相当する。

表1 ‘やぶきた’：‘めいりよく’ 混合試料からの品種識別

試料	品 種	1 回	2 回	3 回	平均値
5:5 混合	やぶきた	10	13	11	11.3 (47.1%)
	めいりよく	14	11	13	12.7 (52.9%)
9:1 混合	やぶきた	19	21	21	20.3 (84.6%)
	めいりよく	5	3	3	3.7 (15.4%)

試料より茶葉24片をサンプリングし個別に品種識別を行った。いずれも χ^2 検定（0.1%水準）により混合比に適合した。

成果活用面の留意点

国内46品種・系統以外のパターンが見出された場合、外国産茶であることが推定できるが、希少品種や在来品種もあるので、直接的に外国産を識別可能なわけではない。

今後の発展方向

- ①新たなマーカーの構築による国内品種識別の簡易化・高精度化
- ②原産国を識別可能なマーカーの構築
(機能解析部・氏原ともみ)

茶の送風式捕虫方法および 乗用型送風式捕虫機

研究のねらい

現在、茶の新芽を加害する害虫の防除体系には化学合成農薬が使用されているが、化学合成農薬では散布作業が重労働なうえ、薬剤抵抗性による防除効果の低下、農薬ドリフトによる環境汚染などの問題がある。そこで、殺虫剤を使わずに害虫を物理的に防除する作業機を開発する。

研究の成果

①考案した防除方法は、茶樹の摘採面に強制風あるいは水滴を含む強制風（ウォーターアシスト）を吹き付け、吹き飛ばした害虫を回収袋で捕獲あるいは圧死させる（図1）。

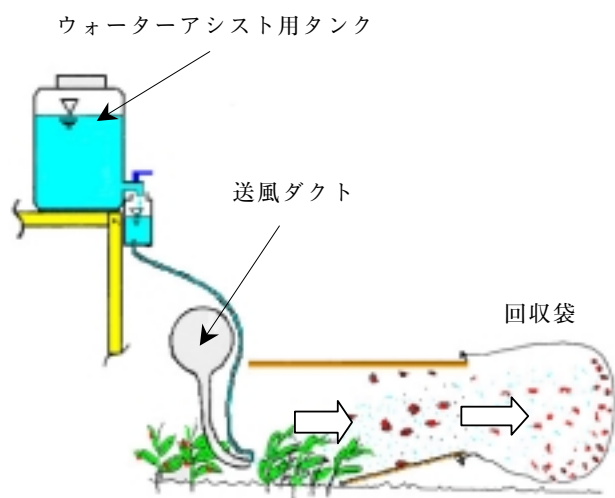


図1 送風式捕虫方法の概略図

②本方式では摘採面に生息するチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、カンザワハダニ等の害虫を捕獲できた。また、ウォーターアシストでは害虫成虫の翅の損傷や幼虫・卵の除去に効果があった。

③開発した乗用型送風式捕虫機（図2）では、カンザワハダニ雌成虫の除去率が82%と高く、作業時間は10a当たりわずか27分と楽にしかも効率的に害虫防除作業ができた（表1）。



図2 乗用型送風式捕虫機

全長×全幅×全高：1770×2010×1650mm
機体質量：492kg、風量：24m³/分、ノズル噴霧量：0.86ℓ/分

表1 乗用型送風式捕虫機の作業特性

カンザワハダニ雌成虫の除去率	82%
10a当たり使用水量	25ℓ
10a当たり作業時間	27分
作業効率	75%

注) 1. 供試茶園：平坦地、うね長63m、うね幅1.8m、枕地幅3m
2. 供試樹：弧状3000R、樹高48cm
3. 作業効率：[防除作業時間/全作業時間]×100

今後の発展方向

①本機の使用時期・回数などの利用技術を明らかにし、茶園における農薬使用量削減技術を確立する。
②傾斜地茶園や被覆栽培茶園に適応する小型・軽量の送風式捕虫機を開発する。

（茶業研究部・宮崎昌宏）

先端技術を活用した農林水産研究高度化事業 —野菜・茶およびウメの 原産地表示判別技術の開発—

研究のねらい

(1)安定同位体比測定、栽培土壌と生産物の元素分析による、野菜・茶およびウメの原産地判別技術を開発する。同時に、この判別技術を補完する目的で、(2)品種識別技術の開発および(3)生産・流通における履歴管理・情報システムの開発を行い、これらを総合化することで実用可能な判別技術とする。

研究の内容

3つの中課題名と研究の内容は以下の通りである。

●原産地判別技術の開発

茶：茶葉および栽培土壌の安定同位体比測定による外国産と国内産の判別技術の開発。茶葉と栽培土壌の元素組成分析による国内産の判別技術の開発。

野菜：一次および二次加工野菜並びに生鮮野菜の元素組成分析による外国産と国内産の判別技術の開発。

ウメ：果実および栽培土壌分析による外国産と国内産の判別技術の開発。

●品種識別技術の開発

茶：DNA解析による緑茶品種識別技術の開発。

野菜：DNA抽出技術の開発とDNA解析によるイチゴおよびエダマメの品種識別技術の開発。

ウメ：形態特性を用いたウメの品種識別技術の開発。

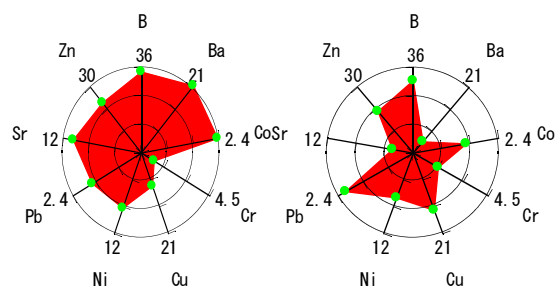
●生産・流通における履歴管理・情報システムの開発

茶：栽培から流通までの一貫した履歴管理・情報システムの開発と原産地偽装判別技術の開発。



取り組みの現況

茶においては、ストロンチウム (Sr) とバリウムの含量比から中国産と国内産との判別の可能性が示されている。ブロッコリーにおいては、Srとナトリウム含量比からカリフォルニア産と国内産との判別の可能性が示されてる。茶およびイチゴにおいては、DNA抽出法の改良が進み、また、マーカーも構築されている。WebインタフェースとCGIプログラムによりインターネットを経由してデータベースにアクセスする茶の履歴管理・情報システムが構築されている。3年間の研究期間の今年度は2年目に当たることから、実用化に向けた更なる研究の進展が期待される。



元素組成分析による静岡茶と鹿児島茶の判別
(イメージ図)

(機能解析部・木幡勝則)

研究会のお知らせ

平成15年度野菜茶業課題別研究会の開催計画

課 題 別 研 究 会	と き	と こ ろ
1. 耕種的技術等を活用した野菜の高品質・高付加価値化技術の開発 (問合せ先：葉根菜研究部・生産システム研究チーム TEL029-838-8529) 各野菜産地から、農産物の差別化手段として、高品質化・高付加価値化技術の開発に対する要望が一段と強まっている。本研究会では、耕種的技術を中心に開発された技術について意見交換し、野菜の高品質・高付加価値化技術の今後の新たな展開方向を議論する。	平成15年10月15日(水) ～16日(木)	茨城県つくば市 (つくば農林ホール)
2. メロンの育種と品質に関する諸問題 (日本種苗協会との共催) (問合せ先：果菜研究部・ウリ科育種研究室 TEL059-268-4666) わが国におけるメロン育種を振り返ると共に、消費ニーズの動向について考え、育成品種について試食を交えながら意見交換を行うことにより、これからのメロン育種と栽培技術の開発方向について討議を行う。また、病害やメロンの高品質化に関するより詳細な検討を行う。	平成15年10月21日(火) ～22日(水)	三重県津市 (三重県総合文化センター)
3. 環境に優しい養液栽培の現況と展望 (問合せ先：果菜研究部・生育特性研究室 TEL0569-72-1596) 現在の養液栽培の問題点、環境に優しい養液栽培装置開発の技術的課題、この装置導入における経営的問題点を整理し、環境に優しい養液栽培システムのあるべき姿を確認するとともに、今後の研究の展開方向を明らかにする。	平成15年10月23日(木) ～24日(金)	愛知県武豊町 (武豊町立中央公民館)
4. 茶品種登録50年の総括と今後の育種の展開方向 (問合せ先：茶業研究部・育種研究室 TEL0547-45-4651) 今後、品種化を進めていくため、あるいは茶育種の新たな展開を図っていくために、これまでの茶育種事業・品種普及に関する総括を行うとともに、今後の展開方向を探る。	平成15年11月13日(木)	静岡県金谷町 (お茶の郷)
5. 野菜及び緑茶品種の育成者権保護と偽装表示防止のための品種識別技術開発の現状と今後の課題 (問合せ先：機能解析部・遺伝特性研究室 TEL059-268-4655) DNA多型を用いた品種識別技術の現状とイチゴと緑茶品種識別への取り組みを紹介し、育成者権の保護と偽装表示防止に向けた技術開発について議論を行う。	平成15年11月20日(木)	茨城県つくば市 (つくば農林ホール)

(企画調整部・連絡調整室)

所の動き

平成14年度「国産野菜の持続的生産技術の開発」(国産野菜プロ) 推進会議報告

平成15年2月12、13日の2日間にわたり、標記会議が本所(安濃)において開催された。出席者は、矢澤、杉山、泉の各評価委員の先生方をはじめ、総勢125名であった。

まず全体会議において、農研機構中村園芸研究担当理事、農林水産技術会議事務局佐々木研究開発企画官の挨拶のあと、本プロジェクトを平成15年度から引き継ぐ「ブランド・ニッポン」プロ野菜系の研究推進体制等について、主査の石内所長が説明した。

その後3分科会に分かれ、第1分科会では省力・機械化チームが吉岡チームリーダーの司会により、第2分科会では個性化野菜チームの第1、第2サブチームが菅野チームリーダーの司会により、また、第3分科会では品質履歴チームおよび個性化野菜チーム第3サブチームが、山下チームリーダーならびに木村サブリーダーの司会により、各実施課題の研究成績・設計がそれぞれ検討された。

さらに、「連携促進会議」と題して、「ブランド・ニッポン」野菜系の各ユニット別に分かれてそれぞれテーブルを囲み、各ユニットリーダーの司会で連携の確認や問題点・意見の集約が行われた。最後に、石内主査の司会による「ユニットリーダー会議」で締めくくられたが、両会議合わせて1時間の予定を4時間に延長するほど、熱心な検討が行われた。

(研究推進事務局・ユリ科育種研究室長・小島昭夫)

所の動き

平成14年度野菜茶業試験研究推進会議報告

平成14年度野菜茶業推進会議（本会議）は、平成15年2月21日に、本所（安濃）で、農林水産省をはじめとする33名の参加を得て開催された。農林水産技術会議事務局、生産局、農業技術研究機構本部からの挨拶を兼ねた中央情勢報告の後、次のような議題について検討を行った。

新品種候補系統として、ナス安濃2号、トマト桔梗交31号、ヤーコンSY206、ヤーコンSY217、茶埼玉37号、茶宮崎18号、茶宮崎20号の7品種が承認された。

重要研究問題「野菜・茶の生産・流通における安全・安心確保に関する技術開発」について、各部会毎に討議内容が報告され、総括として、機能解析部長から、危害の低減と表示の信頼性向上を目指すこと、機能解析部上席研究官を安全安心担当として体制を強化したこと、研究加速のため競争的資金の獲得に努めることなどが報告された。

次年度重点的に取り組む研究推進方向として、先の重要研究問題と関連して、安全・安心研究課題の推進に関する基本的な考え方が提案され、討議を行った結果、庶民が納得できるデータを適切なタイミングで発表できるよう準備しておくことが必要との認識で一致した。

「野菜・茶業」調整区分への要望事項では、生産局野菜課、特産振興課、種苗課から出された要望について、現時点の取組状況が説明された。

その他、研究推進体制に関して、武豊野菜研究拠点に施設園芸再構築のための技術開発プラザの設立案等の説明があり、参加者から積極的に支援する旨の発言があった。（連絡調整室長・吉富 均）

平成14年度高度化事業（原産地判別・硝酸塩）推進会議報告

野菜茶業研究所は、平成14年度から開始された農林水産研究高度化事業（研究領域設定型研究）のうち、「野菜・茶およびウメの原産地表示判別技術の開発」と「野菜における硝酸塩蓄積機構の解明と低減化技術の開発」の2課題について、中核機関として研究総括の任を負っている。「原産地判別」推進会議が2月24、25日の2日間、また「硝酸塩」推進会議が25、26日の2日間野菜茶業研究所大会議室で開催された。

「原産地判別」推進会議は、技術会議事務局、外部委員、課題担当者など43名の参加の下、研究交流科から知的所有権に係わるバイ・ドール法適用の説明、課題担当者から平成14年度の研究成績が発表された。茶では土壌からの金属元素抽出法に改善の必要性があること、野菜では外国産と国産品との識別の可能性が報告された。ウメ加工品ではCa、Mn、Cuに着目した判別の可能性が示された。

「硝酸塩」推進会議は、59名が参加した。硝酸塩濃度に対する品種、光強度と硝酸還元酵素の関与、養液土耕法による低減化、局所施肥、緩行性肥料の利用と減肥による低減化の可能性が示された。

（機能解析部長・山下市二）

平成14年度侵入病害虫の防除に関する研究推進会議報告

近年、施設野菜を中心に海外から侵入した病害虫による被害が急増している。これらの発生生態を解明し防除対策を立てるため、当所を主査場所として実施している標記プロジェクト研究の推進会議が平成15年3月18、19日に本所（安濃）で開催された。研究の対象はいずれも平成8年以後にわが国に侵入して大きな被害を出している、①シルバーリーフコナジラミが媒介するトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）、②多くの果菜類等を加害するトマトハモグリバエ、③ミカンキイロアザミウマが媒介して多くの花きを加害するインパチエンスネクロティックスポットウイルス（INSV）の3種である。病害虫ごとに本年度の成績、今後の研究推進方向が議論され、高浪、大野、杉本、大木の各評価委員の先生から評価をいただいた。TYLCVの伝搬に必要な吸汁時間と薬剤による伝播防止効果、融合タンパク質を用いたTYLCV特異的抗血清の作製と血清学的診断法の開発、侵入害虫トマトハモグリバエに対し高い効果を示す薬剤、INSV媒介アザミウマ種の特定が主要成果に選定された。TYLCVに関しては本年度で完了とし、速やかに成果を公表することとした。（研究調整官・河合 章）

平成14年度野菜茶業研究所評価委員会報告

平成14年度野菜茶業研究所評価委員会は、平成15年3月24日に、本所（安濃）で、三重大学の小畑農学部長をはじめとする8名の評価委員の出席を得て開催された。中村農業技術研究機構園芸研究担当理事の挨拶の後、次のような事項について、野菜茶業研究所側から説明し、評価していただいた。

業務運営の効率化については、評価・点検の実施、研究資源の効率的活用、研究支援の効率化及び充実・高度化、連携、協力の促進、管理事務業務の効率化、職員の資質向上等について説明した。

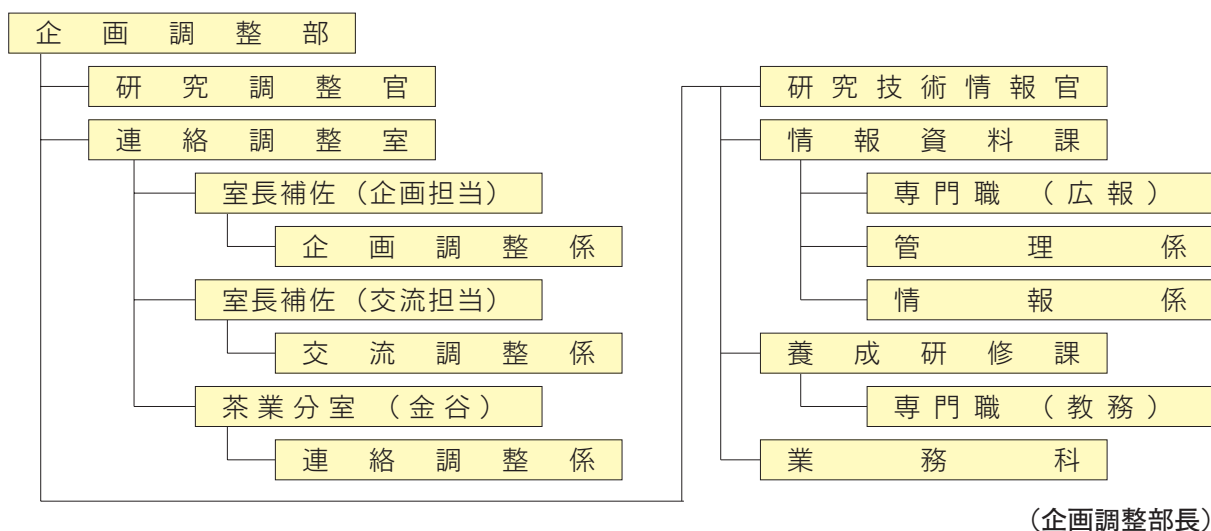
研究業務に関しては、まず今年度の研究成果の中からピックアップした3つの「自慢できる成果」について説明し、続いて、10の大課題ごとに成果の概要や課題の達成度について説明した。

前年度評価委員会における3つの指摘事項に対しては、それぞれの対応状況について説明した。

その後、総合的な質疑応答を行い、各評価委員の所見をいただいて閉会した。本評価委員会の詳細な報告については、当研究所のホームページで公開されることになっている。（連絡調整室長・吉富 均）

企画調整部が再編強化されました

企画調整部は、研究企画力の向上、研究企画と交流に関する総合的・一体的な調整及び推進機能の向上、研究成果の利用促進と広報活動の強化を目的として、平成15年4月から下記のように再編強化されました。一層のご支援とご協力をお願い致します。



平成14年度農業技術研修生修了式及び平成15年度農業技術研修生入所式

平成14年度農業技術研修生（茶業研修）修了式は、平成15年3月11日に研修修了生、修了生の父母並びに多数の職員が出席して、野菜茶業研究所金谷茶業研究拠点において行われた。

修了生には、野菜茶業研究所長から所定の課程を修了したことを証する修了証書が一人ひとりに授与された（写真）。

本年度の修了者は18名で、その進路状況は、就職1名、研修就職（2～3年間）3名及び自宅就農14名である。

なお、平成15年度の研修は4月4日から2年生の研修が始まっており、1年生（20名）は4月8日の入所式以降学科と実習に取り組んでいる。（企画調整部・養成研修課）



所の動き

つくば農林研究団地一般公開

4月16日、平成15年度科学技術週間に併せて農林研究団地の一般公開が行われ、野菜茶業研究所も参加した。今年は、金谷茶業研究拠点からの支援を受け、リサーチギャラリーの一角において当所で開発した各種お茶の試飲会を開き、見学者に味わっていただいた。また、根箱を使って「キャベツの生育と施肥技術」に関する展示を行い、セル成型育苗した野菜苗をプレゼントした（写真）。当日の見学者は2,800人を超え、いずれも大盛況で、野菜苗は昼過ぎに品切となった。

（生産システム研究チーム長）



特許・実用新案・著作権

(1) 登録済み特許・実用新案・著作権

（平成14年12月1日～平成15年3月31日）

種 類	件 名	発 明 者	登録番号	登録年月日	備 考
特許権	ズッキーニ黄斑モザイクウイルスの非病原化方法	寺見文宏	3368333	平成14.11.15	
特許権	種なし果実の作出方法	杉山慶太、森下昌三	3376553	平成14.12. 6	
特許権	アレルギー及び炎症治療方法	辻 顕光、山本万里 川本恵子（生研機構） 立花宏文（九州大学）	6491943	平成14.12.10	外国特許 （アメリカ）
著作権	3D形状モデルによる植物 個体群受光量解析プログラム	高市益行、鹿沼隆宏 （東出忠桐、伊吹俊彦、 角川修、笠原賢明、近畿中国 四国農業研究センター）	P7834号-1	平成15. 2.14	

(2) 出願中の特許・実用新案権

（平成14年12月1日～平成15年3月31日）

種 類	件 名	発 明 者	出願番号	出願年月日	備 考
特許権	果菜類の選択収穫方法及び装置	雁野勝宣、林 茂彦、 黒崎秀仁、河野真人	2002-349712	平成14.12. 2	
特許権	幼若ホルモン酸メチル基転 移酵素遺伝子およびその利用 法	篠田徹郎、糸山 享（科学技 術特別研究員）、浜村徹三	PCT/JP03/ 00415	平成15. 1.20	国際出願 日本、アメ リカ、ドイ ツ、スイス
特許権	茶園用送風式防除機と茶園 用霜取方法	宮崎昌宏、鈴木俊司、 武田光能、安藤安志、 深山大介、荒木琢也 寺田順一（㈱寺田製作所） 景山 淳 " 西村 博 " 内田忠夫 "	2003-17853	平成15. 1.27	

種 類	件 名	発 明 者	出願番号	出願年月日	備 考
特許権	茶葉を原料とした抗アレルギー作用を有する機能性食品素材	山本万里 永井 寛（アサヒ飲料（株））	2003-18017	平成15. 1.27	
特許権	低カフェインの茶葉からの抗アレルギー成分含有機能性飲食品	山本万里 永井 寛（アサヒ飲料（株））	2003-18018	平成15. 1.27	
特許権	抗アレルギー効果増強製造法及び本法を用いて製造された機能性飲食品	山本万里 永井 寛（アサヒ飲料（株））	2003-18019	平成15. 1.27	
特許権	茶園管理装置並びに茶園管理方法	深山大介、荒木琢也、 宮崎昌宏 野崎智洋（カサワキ機工（株）） 渡辺康次 〃	2003-52964	平成15. 2.28	
特許権	新規エステラーゼ、その生産菌及び製造法	篠原 信、上原洋一、 中野明正	2003-71376	平成15. 3.17	

新品種・中間母本

品種登録済み品種

（平成14年12月1日～平成15年3月31日）

作物名	品 種 名	登録番号	登録年月日	育成場所及び育成者	特 徴
メロン	メロン中間母本農4号	10977	平成15. 2.20	野菜茶業研究所（安濃） 石内傳治、小原隆由、 吉田建実、若生忠幸、 小島昭夫	整枝作業の省力化が可能な短側枝性の育種素材系統である。少側枝性の雑草メロン系統‘LB-1’にノーネット品種‘伊麗莎白’を戻し交配して育成された。着果節位以上に発生する側枝の大部分が10cm内外で伸長を停止するため、側枝摘除作業が大幅に省力化できる。果実は黄皮白肉のノーネットで、果重600～900g、Brix10～12程度である。レース1.2yを含むメロンつる割病に抵抗性を有する。
茶	はるみどり	11102	平成15. 3.17	野菜茶業研究所（枕崎） 安間 舜、武田善行、 築瀬好充、松下 繁、 家弓實行、近藤貞昭、 八戸三千男、根角厚司、 武弓利雄、鳥屋尾忠之、 池田奈実子、和田光正、 佐波哲次、大前 英、 田中淳一	2000年に‘かなやみどり’を母親、‘やぶきた’を父親とした交配組合せから選抜育成した煎茶用の晩生品種。茶農林49号。生葉収量は多く、特に一番茶が多収となる。煎茶品質はうま味があり、渋みが少ない。

人の動き

●異動関係

(平成14年12月1日～平成15年4月1日)

発令年月日	氏名	新所属	旧所属
14.12.31	大沢キミコ	辞職（勸奨）	総務部金谷総務分室庶務係長
	反中 雅之	辞職（自己都合）	総務部会計課調達係長
15.1.1	池杉美知男	総務部金谷総務分室会計係長	果樹研究所総務部興津総務分室庶務係長
	高橋 伸幸	総務部会計課調達係長	総務部金谷総務分室会計係長
15.2.1	佐藤 敏明	総務部金谷総務分室庶務係長	独立行政法人農業生物資源研究所 総務部会計課（予算決算係）
15.2.20	西村 発美	退職（臨時的任用期間満了）	総務部金谷総務分室（庶務係）（臨時的任用）
15.2.21	青島 智子	職務復帰総務部金谷総務分室（庶務係）	（育児休業）
15.3.1	菊地 直	葉根菜研究部主任研究官 （土壌肥料研究室）【つくば駐在】	葉根菜研究部主任研究官（土壌肥料研究室）
15.3.31	菅野 紹雄	定年退職	野菜研究官
	丹野 吉男	辞職（勸奨）	企画調整部業務科総括作業長【つくば駐在】
	佐久間青成	定年退職	果菜研究部上席研究官
15.4.1	穴戸 良洋	野菜研究官	東北農業研究センター野菜花き部長
	萩原 廣	東北農業研究センター野菜花き部長	企画調整部研究企画科長
	後藤 俊夫	企画調整部情報資料課長	農林水産省農林水産技術会議事務局筑波事務所 電子計算課指導係長
	立野 利武	総務部会計課長	農林水産省農林水産政策研究所 企画連絡室広報課長
	十鳥 博	企画調整部連絡調整室室長補佐 （交流班担当）	総務部武豊総務分室長
	池杉美知男	企画調整部連絡調整室茶業分室長	総務部金谷総務分室会計係長
	竹ヶ原徹美	総務部武豊総務分室長	果樹研究所企画調整部研究企画科企画 調整係長
	鈴木 良穂	企画調整部情報資料課専門職（広報）	企画調整部研究交流科専門職（研究交流）
	山崎 順一	企画調整部連絡調整室企画班企画調整係長	総務部武豊総務分室用度係長
	稲田登美子	企画調整部連絡調整室交流班 交流調整係長	企画調整部研究交流科交流調整係長
	伊藤 明美	企画調整部連絡調整室茶業分室 連絡調整係長	企画調整部研究企画科企画調整係長 【金谷駐在】
	相川美由紀	企画調整部情報資料課情報係長	動物衛生研究所企画調整部情報資料課 （情報管理係）
	橋本 嘉明	総務部庶務課庶務係長	九州沖縄農業研究センター総務部久留米総務分室 会計係長
	廣野 哲也	総務部金谷総務分室会計係長	総務部金谷総務分室用度係長
	永井美佳子	総務部会計課専門職兼中央農業総合研究センター 総務部会計課（調達係）	総務部会計課兼中央農業総合研究センター 総務部会計課（用度係）
	佐野 光弘	企画調整部（連絡調整室交流班交流調整係）	総務部庶務課（庶務係）
	柴田 尚美	総務部庶務課（人事係）	企画調整部（研究企画科企画調整係）
	小野田寛子	総務部会計課（審査係）	総務部庶務課（人事係）
	大迫 宏征	総務部武豊総務分室（会計係）	新規採用
	山田 久代	総務部武豊総務分室専門職（会計係）	総務部武豊総務分室専門職（用度係）
	松井 宏幸	総務部金谷総務分室（会計係）	総務部金谷総務分室（用度係）
	佐藤 忠一	独立行政法人農業工学研究所企画調整部 情報資料課長	企画調整部情報資料課長
	松尾 勉	畜産草地研究所総務部会計課長	総務部会計課長
	澤田 明美	農林水産省農林水産技術会議事務局 筑波事務所研究情報課収書管理第1係長	企画調整部情報資料課情報係長
	奈良 司	畜産草地研究所総務部会計課審査係長	総務部庶務課庶務係長
	渡邊 邦彦	動物衛生研究所総務部会計課施設管理係長	総務部枕崎総務分室会計係長
	佐藤 光一	独立行政法人農業工学研究所総務部業務 管理課業務係長	総務部会計課（審査係）
	松岡 律衣	企画調整部（業務科）	新規採用

発令年月日	氏 名	新 所 属	旧 所 属
15.4.1	泉 哲朗	企画調整部（業務科）	新規採用
	本田 康之	総務部金谷総務分室（会計係）	総務部金谷総務分室（用度係）
	伊藤 康博	花き研究所企画調整室（業務関係）	企画調整部（業務科）【つくば駐在】
	河合 章	企画調整部研究調整官	果菜研究部虫害研究室長
	吉富 均	企画調整部連絡調整室長	企画調整部研究交流科長
	吉川 亮	企画調整部業務科長	東北農業研究センター作物機能開発部 麦育種研究室長
	古谷 茂貴	果菜研究部上席研究官	東北農業研究センター総合研究部 総合研究第3チーム長
	鈴木 克己	企画調整部連絡調整室室長補佐 （企画班担当）	独立行政法人国際農林水産業研究センター沖縄 支所主任研究官（環境ストレス耐性研究室）
	廣兼 久子	企画調整部	新規採用
	荻野 暁子	企画調整部	新規採用
	廣野 祐平	企画調整部	新規採用
	大森 弘美	果菜研究部（作業技術研究室）	生物系特定産業技術研究推進機構企画部 （野菜機械等開発チーム第1）兼 園芸工学研究部（野菜研究グループ）
	坂上 修	東北農業研究センター企画調整部 業務第3科長	企画調整部業務科長
	今田 成雄	東北農業研究センター総合研究部総合研究第3チーム長	機能解析部環境ストレス研究室長
	山崎 浩道	東北農業研究センター総合研究部 主任研究官（総合研究第3チーム）	企画調整部主任研究官（研究企画科）
	大前 英	独立行政法人国際農林水産業研究センター沖縄支所 主任研究官（環境ストレス耐性研究室）	茶業研究部主任研究官（育種素材開発チー ム）
	濱野 恵	東北農業研究センター総合研究部主任研究官（総合研究第3チーム）	機能解析部主任研究官（生育生理研究室）
	山崎 博子	東北農業研究センター野菜花き部主任研究官（野菜花き栽培研究室）	機能解析部主任研究官（生育生理研究室）
	浦嶋 泰文	東北農業研究センター畑地利用部 （畑土壌管理研究室）	葉根菜研究部（土壌肥料研究室）【つく ば駐在】
	村上 弘治	葉根菜研究部土壌肥料研究室長*	葉根菜研究部土壌肥料研究室長【つくば駐在】
	菊地 直	葉根菜研究部主任研究官* （土壌肥料研究室）	葉根菜研究部主任研究官（土壌肥料研究室） 【つくば駐在】
	白川 隆	葉根菜研究部病害研究室長*	葉根菜研究部病害研究室長【つくば駐在】
	山内 智史	葉根菜研究部（病害研究室）*	葉根菜研究部（病害研究室）【つくば駐在】
	木嶋 伸行	葉根菜研究部主任研究官* （土壌肥料研究室）	葉根菜研究部主任研究官（土壌肥料研究 室）
	吉岡 宏	果菜研究部虫害研究室長（事務取扱）	葉根菜研究部部長
	山下 市二	機能解析部環境ストレス研究室長（事務取扱）	機能解析部部長
	林 宣之	機能解析部（茶品質化学研究室）	任期付研究員（平成18年3月31日まで）

* 葉根菜研究部土壌肥料研究室及び病害研究室のつくば野菜研究拠点への集中化に伴う異動

●海外出張・派遣

（平成14年12月1日～平成15年4月1日）

所 属	氏 名	目 的	行き先（国名）	期 間
果菜研究部	坂田 好輝	ウリ科野菜会議2002	米国	H14.12. 6～H14.12.15
機能解析部	山本（前田）万里	ストリクチニンのマスト細胞への影響解析及び研究打合せ	米国	H14.12.20～H14.12.28
茶業研究部	田中 淳一	第11回植物と動物のゲノム会議（USDA主催）	米国	H15. 1.10～H15. 1.17
葉根菜研究部	鈴木 徹	第11回植物と動物のゲノム会議（USDA主催）	米国	H15. 1.10～H15. 1.19
機能解析部	布目 司	第11回植物と動物のゲノム会議（USDA主催）	米国	H15. 1.10～H15. 1.17
果菜研究部	佐藤 衛	国際植物病理学会およびオーストララシア植物病理学会	ニュージーランド	H15. 2. 1～H15. 2. 8

人の動き

●外国人受入研究員

(平成14年12月1日～平成15年4月1日)

氏 名	所 属	受入れ研究室名	課 題 名	期 間
Stefania BIONDI	イタリア・ローニャ大学	機能解析部・収穫後生理研究室	果実の生長および成熟におけるポリアミンおよびエチレン代謝に対するメチルジスモン酸の効果	H14.12. 7～H14.12.22

●特別研究員等

(平成14年12月1日～平成15年4月1日)

項 目	氏 名	受入れ研究室名	課 題 名	期 間
特別研究員	春日 志高	果菜研究部・虫害研究室	野菜類を加害するコナダニ科の生活史戦略とその管理に関する研究	H15. 1. 1～H16. 3.31
科学技術特別研究員	糸山 享	葉根菜研究部・虫害研究室	アブラムシ類における多系発現の分子機構の解明	H15. 4. 1～H15.12.31
重点研究支援協力員	島津 樹一	葉根菜研究部・病害研究室	DNA多型を用いた野菜の土壌病害抵抗性に関する研究	H15. 4. 1～H16. 3.31
重点研究支援協力員	上枝 素子	果菜研究部・病害研究室	DNA多型を用いた野菜の土壌病害抵抗性に関する研究	H15. 4. 1～H16. 3.31
重点研究支援協力員	諏訪部圭太	機能解析部・育種工学研究室	DNA多型を用いた野菜の土壌病害抵抗性に関する研究	H15. 4. 1～H16. 3.31
重点研究支援協力員	藤村みゆき	機能解析部・遺伝特性研究室	DNA多型を用いた野菜の土壌病害抵抗性に関する研究	H15. 4. 1～H16. 3.31
重点研究支援協力員	近藤 正敏	機能解析部・遺伝特性研究室	DNA多型を用いた野菜の土壌病害抵抗性に関する研究	H15. 4. 1～H16. 3.31

●技術講習

(平成14年12月1日～平成15年4月1日)

所 属	氏 名	受入れ研究室名	課 題 名	期 間
鹿児島県バイオテクノロジー研究所	長井 純一	機能解析部・遺伝特性研究室	DNAマーカーを用いたイチゴ品種識別技術の開発	H14.12.10～H14.12.18
大韓民国晋州産業大学校農学部	Ko Young Ok	茶業研究部・育種研究室	チャの育種技術	H15. 2.15～H15. 8.15
JA川上そ菜販売指導販売課	渡辺 隆明	葉根菜研究部・作型開発研究室	レタスの作型、栽培体系及び今後の課題等	H15. 2.24～H15. 3.20
三重大学工学研究科博士後期課程	前川 憲一	葉根菜研究部・虫害研究室	ディファレンシャルディスプレイ法による遺伝子発現解析	H15. 3. 3～H15. 3.31
財務省関税中央分析所調査企画室	片山 貴之	機能解析部・遺伝特性研究室	DNA分析によるイチゴ品種識別についての関連技術	H15. 3.24～H15. 3.26
財務省関税中央分析所第2分析室	赤崎 哲也	機能解析部・遺伝特性研究室	DNA分析によるイチゴ品種識別についての関連技術	H15. 3.24～H15. 3.26



野菜茶業研究所ニュース 第7号【2003年(平成15年)6月発行】

編集・発行 独立行政法人 農業技術研究機構 野菜茶業研究所

〒514-2392 三重県安芸郡安濃町大字草生360番地

TEL.059(268)4626 (情報資料課) FAX.059(268)3124 Web URL:<http://vegetea.naro.affrc.go.jp/>

印刷：伊藤印刷株式会社